

## 『男の遺書』

作・サカモトエリ

ずぶ濡れの雨の中、傘もささずに、雨合羽も身に着けない私をお許してください。降り続く雨は私の存在をかき消してくれて、ないものとしてくれて幾分満足致します。定まらない視線をお許してください。このところ、世に言われる面白きものを見てもつまらないのです、面白きものを作っている人たちに全くもって失礼なのですが、目が開いているけれど、映らないのです。カラーの盲目です。何を言っているのか、わからない？そうですか、私は死を急ぐのです。

男の人生が積むなんて簡単なものです。人の命なんて簡単になくなるのです。アルコールをください、アルコールをください、アルコールをください。何も考えられなくなるくらい、考えたくないんです、女に溺れてしまうから、

仕事がかまくいかないから、お金がないから。アルコールをください、アルコールをください、アルコールをください。もう二度とあの人に合わせる顔がないから、心無く女を抱けるような最低な男

に成り下がってしまったから、かつて触れるのにこわかった、壊れそうな、かわいらしい女だったのに、僕は、ただの性欲の捌け口にしか見えなくなってしまった。最低です。最低です。女なんて所詮抱いてやれば喜ぶのです、髪を撫でて、耳でも甘噛みしてやれば手懐くんです。抵抗しているのは、振りですか、身勝手なのでしょうか、生き損ないの僕はどうかなのでしょうか。

兎角、僕の前で流しているあの涙はなんなのですか、美しいじゃないませんか、本性おき出しで、まじりっけなしで。溶けだしたアイメイクが、僕に似ている。僕の前に涙している。馬鹿な女。馬鹿な女だな。アルコールをください。お前は、もっと自由に蝶のようにどこへでも行けたらろうに、こんな僕に捕まってしまって、全くもって運のない女だな。引くクジ、引くクジがはずれなんだろうな。きっと。お前は、友人の結婚式で特賞などをひいて運をつかい果たしてしまう。そんな女だな。友人もお前なんか引いて、何引いてくれてんだ、もっと盛り上がるおもろいやつに引いて欲しかったと思っているね。残念な女だ。へらへらする笑顔が薄っぺらいんだよ、馬鹿。お前みたいな娘をもった親さんも可哀そうだな。だって、かわいかわい育ててるのに全くもってかわいくないし、現に僕みたいなへぼちんな男に付きまとわれているん

だぜ。全くもって可哀そうだ。お見舞い申し上げます。行為後に目が覚めると僕は悲しくなっていた。僕は最低な人間だ。一人に選ぼうと、こいつのために生きようと思った女ですら失望してひどい態度をとってしまう。何回食器を叩きつけた、何回ドアを蹴った、何回女に手を挙げた。女の挙動不審がこわい。僕の前でごめんなさい、ごめんなさいと泣く女がこわい。近寄らないでほしい。お前がいるから僕はダメになるんだ、お前がいるから悪いんだ。そんなことがある度に女は食器をひらう。ちいと血を零しながらひらう。手からはポタリ、ポタリと血が落ちる。床に広がるドット柄可愛いじゃありませんか。蹴ったドアを塞ぐキャラクターの絵柄可愛いじゃありませんか。そのかわいらしいキャラクターが僕の心の絆創膏ですか。ふん、違うよね。アルコールをください。

ある日、久しぶりに外に出ました。公園の空気はとてもきれいでした。昼下がりの光の中。まどろむ時間、生まれて千日も経たないであろう子が遊んでいました。近くのベンチで母親と思しきおぼしき女がその様子を見たり、見ていなかったりしていました。写実としては、とてもきれいな構図であり、僕の汚くて、臭くて、寄

れたジャンパー姿だけが馴染みませんでした。たぶん。

母親であろう女は、スマートフォンと子供をある程度の時間をもって見たり、見なかったりをくりかえしているようでした。子供は静かに遊んでいたのです、かわいらしい様子ともいきませんが、なぜか愛おしく、穢れなきその小さな塊が眩しく見えました。かつて僕にもあんな頃があったのでしょ、今のような姿になるために生まれてきた予定はなかったのですから。女は画面をしゅっしゅとかまっていました。いいねとか、ヤフー知恵袋とか見ているんでしょう。ことに孤独なのでしょう。育児休暇中で孤独なのでしょう。友達も今は会えないのでしょう。女は孤独な生き物です。男に寄り縋って夢を見て、自分のコピーを作れる、孤独でそれを見ない振りをする能力に長けている生き物です。羨ましいじゃないか。女がしばらくいいねを押している間に例の穢れなき小さな塊は女の視線から消えていました。よちよち歩きの塊は汚いよれよれ男の足元まで来ていました。女は気づいておりませんでした。その小さな涎たらしは僕のズボンに寄り縋ってたっちし始めました。なにやら言葉にならない言葉をぶつぶつ言っていました。

言葉知らないのですね。よいことです。おげに人を傷つけなくてすむではありませんか。羨ましいじゃないか。僕はどうしても触りたくなってぶつぶつの愛おしき塊を持ち上げることにしました。僕のもではないので、えらく丁寧に持ち上げたつもりです。その塊はえらく重いように感じました。命だからでしょうか、いいにおいがしました。女の乳を飲んでいるからでしょうか。いいにおいでした。心の汚れを一枚、一枚剥ぎ落してくれるかのようないいにおいでした。それと同時に、ああ、僕、これに触る資格なんてないや、僕みたいな男が穢れなき塊をさわったらバチがあたるとも思いました。涙が出ました。僕は女が涙を流す姿に狼狽え、優越感に浸りましたが、自身も行為のあと泣いていましたが、赤ん坊の前では、なぜかそれとはちがって涙がでました。昼下がりに汚い男が泣いているのです、星屑は零れません。僕はどうしたらいいかわかりません。穢れなき塊の頬はいつしか僕の水分で汚れてしまいました。女はまだいいねを押しています。びしゃびしゃのほほの赤ん坊はえらくきれいな透きとおった瞳で僕を見ます。言葉を持たずとも真実を帯びた瞳で僕を見てきます。どうしたらよかったのでしょうか、許されたかったのでしょうか。僕はつよく赤ん坊を抱きました。女にも許されているようで許されない。いえ、

許される訳はないのに。この塊を抱くことによって許されるように  
思えたのです。赤ん坊のいいにおい。赤ん坊のいいにおい。い  
いにおい。いいにおい。いいにおい。いいにおい。いいにお  
い。「何をしていますか、離してください」すごい剣幕で女が  
走ってきました。社会と孤立している女です。僕はびっくりして  
「あ、違うんです、違うんです」と繰り返しました。女はすごい勢い  
で赤ん坊を取り返しました。「こわかったねえ。もう大丈夫だよお」  
女は母親の顔になりました。その変わりようたら。。。僕は許さ  
れるための機会をうしない、おまけにそのあと警察まで呼ばれ、  
事情聴取となりました。誘拐するつもりじゃなかったこと、寄ってき  
てかわいかったこと、危害を加える気はなかったことなど百万べ  
ん説明してから、ようやく帰されました。どうやら許される機会  
どころか、怪しくて、不審な臭い男だったようです。それが、僕の  
本性だったようです。物事のエビデンスとしての真実を決めるの  
はいつだって大人です。そう、眼の黄ばんだ大人なのです。映  
したくもないものを映し、触りたくもないものを触っているから、汚  
いのです。何も汚いものをさわっていない赤ん坊はいつだって、  
たとえその子の出生がどうであれ、穢れていないのです。そうし  
て安心しているうちに汚い大人になっていくのです。その証拠に

僕は、今日もアルコールを流し込みました。忘れてください、僕のたわごとです。許されないことを知ったのです、別にあのとき、力づくで女を押し倒したり、赤ん坊の首などすぐに捻り潰せたでしょう、けれどそれをしませんでした。それは僕の良心というべきか、おそれというべきか、原罪からの抵抗でした。悪にもなり切れず、許されせず、ちんけな男です。かつてどうなりたかったかどうかなんてとんと忘れてしまいました。みんなそうでしょう、平気な面して生きているけれど、装っているだけなのです、もしくは自分の犯している罪にも気づけない阿呆なのです。女がもうすぐきます、抱いてやろうか、今日は優しく抱いてやろうかと思いました。自分だってああやって、わが子供に遠慮なしに抱ける日がくるかもしれません。……まさか、こうやって頭をぼーっとさせて空をぼやんと映しながらいるのです。馬鹿みたいです。けれど、けれどね。女はその夜きませんでした。来る日もくる日も来ませんでした。不可思議でした。僕は女のためにアルコールを絶ちましたのに。今日は優しく抱いてやろうかと思った日からアルコールを絶ちましたのに。コールを何度も何度も何度もしたある日、ああ、女は電話番号をかえていました。ああ、女とは連絡がとれなくなってしまうていたのです。

僕は何回も死のうとしました。何度か。何度目かの挑戦です。死にぞこないの僕です。どこにでもいるような女に捨てられたのです。もうゴミ同然です。生まれ変われません、この世では。いつか、やりなおせる日がくるまで、僕は死にながら、もう一人の生きてくれる僕に会えるといいなと思います。あるいは、赤子のころに戻れたならどんなにいいか。どんなにいいかと。もうお別れです、かつてここで何度か決意し、何度か生きようとした僕がいたことを誰かが知って僕に分まで生きてほしいと思います。愛したのは、誰だったのでしょうか。僕は僕を愛したのでしょうか。男の人生が積むなんて簡単なものです。と申しましたが、極めて難しかったです。あがなえない力でもなく、死ぬ勇気さえもっていなかった僕は、繰り返し、傷つき、更生しようと思うたびに <sup>おり</sup> 澱につかまっていきましたから。男の思慮とは難しいものです。幾度もない頭で考えたものです、ことに頭が回らなくお空(そら)を空(くう)を見つめていた気がしますが、もう、本当に盲目になります。さよなら、僕。きっとこれで。敬具